

上海・杭州の旅

阿頼耶 順 宏

一九八六年七月一〇日から一四日までの五日間、毎日文化センターの中国語研修旅行に出かけた。本学の奥田先生と、東洋文化四年生六名も参加した。

大阪を一時に出て、日本航空の直行便で二時間ちょっとでもう上海空港に到着。本場に近い。一衣帯水（イチ・イタイスイ）とよむ。一本の帯のように細い海）を隔てた隣国といわれるとおりだ。

わたしは一八歳一九歳の二年間を、上海の東亜同文書院大学に学んだ。青春期を送ったこの都会は、その後何度も来てはいるが、陸地がみえ、民家の灰色の壁がみえ、緑の田がみえてくるたびに、胸がしめつけられるようになっかしい。

旧市街の建物は、ほとんど四〇年前と変わらない。わたしたちがガーデン・ブリッジと呼んでいた黒い鉄の橋は、外白渡橋といわれる。外国人は無料で渡れる橋であったからだ。橋のたもとにそり立つ大きな建物、上海ホテルはその昔のブロードウェイ・マンションである。

街はどこを歩いても人でいっぱいだ。若い女性の服装が明るくはなやかになったのが目立つ。「文革」後に来たときは、人民服の襟のところから、赤い色のものなどを少し見えるようにするのが精いっぱいのおしゃれだった。それが今は、若い女性の服装に限っていえば日本の街を歩いているような気がするほどだ。ただ、こちらの方がはるかにスリム、すらりと伸びた脚が美しい。

玉仏寺では大勢の僧が読経しているのをみた。建物も内部もきちんと修復されている。

郊外に出ると、住宅とホテルの建築ラッシュ、道路も拡張工事中だ。高層建築の足場がすべて竹をつないで作られているのは、中国各地で見られる風景だが、最初とまった新苑賓館も、帰りに泊った桜花度假村（度假村は休暇村にあたる）というホテルも新築で、初めて泊るホテルだった。日本人のほか外国人観光客も多い。その郊外のホテルまで、わたしたちのバス（日野の小型）は大

大きく揺れながら工事中の道を通る。

鴉外の短編に明治末期の東京を書いた「普請中」というのがあるが、上海はまさに普請中であった。人びとの表情も明るい。公園では若い男女が肩をくみ、木かげでは将棋やトランプに興ずる人びとも多い。

杭州は二〇〇〇年以上の歴史をもつ古い都市、三国時代の越の中心であったし、宋代には臨安と呼ばれて栄えたところ、さすがに落着きのあるゆかしいたはずまいの街だ。街の中心部には近代的な電信電話ビルがそびえ、科学技術交流ビルも建設中であったが、その街の西にある西湖の風景は、いうことばもないすばらしさだ。銭塘江に臨む六和塔は十三層、高さ六〇メートルもある。一〇〇〇年も前にこうしたデッカイ塔を建てたという事実には圧倒される。

郊外からの道も、湖畔の道も、街路樹にすっぽりと覆われていて、緑のトンネルだ。

杭州映画撮影所のシナリオライター胡月偉さんが、奥さんと三歳の坊やをつれてホテルまで来てくれる。彼の小説を翻訳したことで知り合った。五年前には、来年計画出産の予定と話していたが、そのとおりだった。翌日

は中国文学研究者が日本から来たというので、『浙江工人報』記者が取材にくる。あすの新聞に載るといわれたじろぐ。昼はスッポン料理をごちそうになる。

初めての試みとして上海師範大学の学生との交流の希望を出しておいた。日本語科教授の柯森耀教授は、水上勉さんの作品などたくさん翻訳があり、この前日本に来た昆劇のせりふもこの人の翻訳だった。以前からの友人で、よろしくと手紙を出しておいたら、夏休み中なのに夜間部二年の学生たちを召集しておいてくださった。日本語科の先生方も参加して、学生たちの日本語と、こちらの中国語で交歓が始まる。この大学は名門校の一つだが、キャンパスの広いこと、一巡するのにバスを使った。休み中に中国から見学と交流を希望してきたとしたら、担当教員と学生を召集して歓迎できるだろうか、と考えたら、胸がチクチク痛んだ。

五日間ずっとわたしたちに付添って世話してくれた通訳の李野さんは二十八歳の青年だ。大学でドイツ語を専攻したが、思わしいしごとがないので、また四年間日本語を勉強して通訳になったという。去年、早稲田に留

学の資格試験に合格したが、都合がつかず、来年もう一度挑戦して留学したいとっていた。にこやかで上品な感じのいい人で、日本語もうまい。こちらの団体が手帳を手に、中国語で話そうとがんばっているのを喜び、みんなが『新華字典』を買ったがっているのを知ると、何軒もさがし回って、やっとみつけてくれた。署名を頼まれると、一緒にひとりひとり違ったことばも書いてくれた。わたしには「以学為樂」とあって、嬉しかった。バスで別れるとき、李野さんはあいさつのことばを述べながら、眼をうるませた。誠心誠意、人のために尽くす中国の青年通訳のおかげで、今度の旅は、すがすがしく楽しいものになった。(一九八六、八、一七)

中国から帰りの飛行機の中で、今度の旅行の感想を書いてもらった。東洋文化学科から参加した六人の学生の感想を次に転載させてもらうことにする。(五〇音順)

今回このツアーに参加させていただいて、とても楽しく、よかったと思います。私は海外旅行など初めてで、不安があったのですが、添乗員さんもみんなとても楽しい人たちだったし、毎日文化センターのみなさんも気さ

くな方たちで、一緒に楽しく過せました。

私たちは現役の学生なのに、中国に対する知識や会話語学力が乏しいので、他の方々にご迷惑をかけてしまった事もありました。文化センターの方々の向学心には感心させられました。今回のこの旅行でもとても貴重なものを得たと思います。

中国で驚いたこと——まず、ものすごく暑いこと。ホコリっぽいこと。上海はスイカ売りが多い！なんか、妙なおいがる(上海)。スッポン料理。中国人のけんか(なんと女性同志の)。日本語科の人の向学心。上海・杭州間の冷房なしの列車。その他いろいろです。

——宇佐美直子(阿頼耶ゼミ)

初めての海外旅行でしたが、先生や友人たちと一緒に、それ程の不安もなく旅立つことができました。しかし、中国についてからの方が不安がひどくなりました。思っていたことを遥かにこえるカルチャーショックからです。初めて自分が日本人であることを強く感じました。けれど、ガイドの方々はやさしくて、本当に真剣に生きてらして、自分はずかしくなる程でした。

ツアーの方々とも仲よくなれて、とてもうれしかった。

また機会があれば、ぜひご一緒に中国を訪問させていた
だきたいと思えます。

——大野麻友子

あこがれの中国の広大さに感動しました。同じ大学生
でも、中国の人達の熱心さ、まじめさに驚きました。私
なんかと比べものにならないし、恥かしく思いました。
今度また来る機会がある時はもっと勉強して(会話や中
国の歴史など)参加したいと思えます。中国の暑さには
耐えられなかったけど、景色はきれいだったし、感激で
す。

中国と日本の生活の違いなども、少しわかったような
気がします。また、有名な観光地だけでなく、庶民の自
由市場にも行ってよかったです。毎日文化センターの人
たちも、添乗員さんたちもいい人ばかりで、学生生活最
後の旅行を楽しむことができました。感謝しています。

——奥野 美香

今回初めての海外旅行でもあり、大きな期待と不安を
持って参加しました。中国に到着してからびっくりした
のは、旅行日程が、はっきり決められていないことでし

た。日本とはちがうところがたくさんあって、とまどっ
てばかりいました。でも、中国で日本語を勉強している
人はたくさんいて、日本語科の学生さんやガイドさんは、
本当に上手に話すことができるので、うれしくなったり
しました。日本は、あらゆる点で発達しているけれど、
中国の人たちのほうが、素朴で、何事にも熱心で、見習
わなければいけないと思うようなこともありました。(カ
イドさんたちのことです！)

先生に字典も買ってもらったし、地平線も見えだし、
上海のちょっと変なおいを除いたら、楽しい旅行だっ
たと思えます。おつかれ様でした。謝謝!!

——長橋まゆみ(阿頼耶ゼミ)

初めて飛行機から中国を見下した時から、私の中国に
対する認識が非常に不足していることを痛感させられ
ばなしでした。中国語の知識も全くないままに中国に渡
ったことが今回の私の旅行の最大の反省であり、ご一緒
させていただいた毎日文化センターの方々にも非常に悪
かったと思っています。それでも、中国のすばらしい三
人の添乗員の方に会えたことをはじめとして、この旅行
はやはり私にとって、とても価値あるものだったと思

ます。

上海の街のにおいや、冷房のない列車に四時間ゆられたこと、杭州の強い日ざしなど、いろいろありましたが、この旅行に参加させてくださった先生と毎日文化センターの方にとても感謝しています。

——宮本 明子（阿頼耶ゼミ）

生まれて初めての海外旅行なので、不安がいっぱいで、慣れないことばかりでした。中国は、想像していたよりも、はるかに広い国でした。人びともんびりしていて、いかにも大陸的です。風俗、習慣の違いで、とまどうことも多かったですけれど、今まで、教科書やテレビでしか知らなかった中国を、自分の目で見ることでできて、感激です。

上海師範大学の先生も生徒さんも、真剣に日本語を勉強しておられて、日本語が上手なものには感心しました。

私は三年、中国語を勉強したはずなのに、すっかり忘れてしまっていて、毎日文化センターの皆さんの記憶力と、話そうとする意欲に圧倒されてしまいました。ガイドの方々も、本当にいい人たちで、うれしかったです。李さんの言うように、死ぬまで勉強なんですね。

私も、これを機会に、もう一度初めから、中国語にとりくもうと思います。そして、この次、中国に来る時は、一人でも中国語を使って旅行したいと思います。本当に楽しい思い出になりました。先生、色々お世話になり、有難うございました。

——八島 泉